

「ドンクのお父さん」

株式会社ドンク 鈴木 明葉

「カンカンカン!!」

トレーをトングで叩く音。やばい、この聞き覚えのある音は…。慌てて入口に目をやるやいなや、「いつまで待たせるんや、鈴木ー!」

出ました、名物お爺さん、Y様のご来店…。今日も第一声から喝を入れられてしまった。

Y様は、何十年もドンクのパンを買って下さっている超常連のお客様。地下鉄沿線にあるドンクには度々ご来店されるので、彼を知らない人はいないほど。彼は神戸の有名人。

一年前、須磨に異動してきた時、先輩にY様の存在を教えてもらった。「ご来店されたら必ずトレーをお持ちしてパンを取って差し上げて。あと、レジの打ち間違いを一度でもしてしまったら、もう自分のレジには並んでくれないから十分気をつけて」。いったいどんなおそろしいお客様なのだろうと、私は想像上の重鎮にビクビクした。

初対面の日、先輩が私をY様に紹介してくれた。緊張でガチガチになりながらレジを打つ私に、「打ち間違えるなよ!」とひと言。目も合わせてくれない。事なきを得たが、先が思いやられた。やっつけていけるのか。

それから修業の日々が始まった。Y様は多い時で週二、三回のハイペースで来られる。来る度に、人はこんなに怒れるものかと思うくらい、私は怒られた。忙しくてY様のご来店にいち早く気付けないとまず、怒られる。レシートのちぎり方で怒られる、テープの貼り方、手提げ袋の種類を間違うと怒られるし、合計金額を暗算できないと怒られる。ちなみに私は暗算が大の苦手なので、脳の細胞をフル稼働しなければならず、Y様が来られると緊張感やら暗算やらで大変疲れた。

ある休日、父が私に仕事の話を聞いてきたので、何気なくY様の話をした。こんなお客様がいらっちゃって、大きな声で怒られる。だけどいつも買いに来られるのだと。父はその話を聞いて手を叩いて笑った。いったい何がおかしいのだ、人が悩んでいるというのに。父は言った。「お父さんも毎日行くコンビニで同じように怒ってるわ。だからそのお爺さんの気持ち分かるな。その人におまえは育ててもらってるし、かわいがられてるんやで。にくまれ口も全て本心じゃない。

言葉の裏側にある気持ちを読めるようになれよ」。

父が何を言いたいのか、その場ではすぐに理解はできなかった。ただ、父とY様はとつてもよく似ていることに、私はようやく気付いたのだ。すぐ怒るし、頑固。だけど本当は情に厚くて温かい。不器用だからうまくそれを伝えることができないし、憎まれ口ばかり。

父とそんな話をしてから、Y様への苦手意識はほとんどなくなった。注意して下さることは自分のためなのだ、と少しずつだけ思えるようになったし、めげなくなった。

ある時、Y様を一週間くらい見ない時があった。なんだかやけに心配になった。いつもの大きな声が聞けないのは少し寂しかった。変な話だが。

みんなで噂し始めた時、Y様がご来店された。聞くとやはり体調を崩されていたようだ。いつもの喝にも少し覇気がない気がした。Y様に怒られないくらい完璧な販売員になるのが今の目標。けど何だか寂しかったので、暗算はあえてしないで電卓で計算した。「暗算せえ、暗算！ ほかの販売員にレジやってもらわわ！」あれ、顔がほころんでる。いつものY様の怒鳴り声。よし、こうでなくては。いつまでも元気でいてね、お父さん。